

感染対策が一番……新装された小児科外来からの報告。

名古屋記念病院は公益性の高い社会医療法人であり、地域の健康を守る中核病院として担っていけるよう院内整備を行ってきました。

今回は、感染対策を一番のコンセプトとして新装された小児科外来診療の現場について、副院長兼小児科部長長谷川真司先生と小児感染症科部長森田誠先生にお話をお聞きしました。



副院長兼小児科部長
長谷川 真司 先生



小児感染症科部長
森田 誠 先生

■小児科外来は改装により一新しました。その狙いについてお話しください。

●小児科医療では病気を治療することだけではなく、重症の病気を未然に防ぐことも重要です。例えば、ヒブワクチンと肺炎球菌ワクチンが普及したおかげで、治療が困難で生命にも関わる小児の細菌性髄膜炎がここ数年で激減しています。日本では予防接種が立ち遅れていましたが、最近このようなワクチンが次々と導入されて他の先進諸国並みになってきています。これに伴って予防接種を安全で適切に行う必要性も高まっています。

医療機関では予防接種や健診に来院された方が感染症の患者さんと接触する可能性があり、患者さんどうしの感染を避けるためにさまざまな工夫が施されています。当院の小児科でも、これまで午前中と夕方に感染症を中心とした一般外来を、午後から夕方までの時間帯に予防接種や健診、アレルギーや成長ホルモン治療などの慢性疾患(非感染)の外来を行ってきました。しかしながら、予防接種や慢性疾患の患者さんから午前や夕方の診療時間での受診を希望されることも多く、今回の小児科外来の整備

で全ての患者さんを同じ時間帯に診療できるように感染対策を重点に考えて改装を行いました。

■具体的な感染対策の内容についてお話しください。

●まず小児科外来の広さが全体として以前の倍以上となり、診察室も1番から4番までと午後からは6番(午前には脳外科が使用)も使用できるようになりました。これにより空いている診察室を隔離室として使用することもできますし、1番の診察室は独立空調となっているため、水痘や麻疹など感染力が非常に強い病気も安心して診療することができます。

また、1番の診察室の隣には処置室、計測室を配置して2番以降の診察室と距離をおき、さらに制菌カーテンで仕切りをつけることで予防接種や慢性疾患のお子さまと感染症のお子さんを分離したスペースで診療することができるようになりました。

■感染対策以外で工夫された内容についてお話しください。

●小児科の待合室は半透明の壁で仕切りをつけることで他の科の患者

さんの待合室と独立させております。お子さんが泣いたり、走ったりしても保護者の方が少しでも気兼ねをしなくても済むように配慮しました。床も軟らかい素材のものを選択し、万一、転倒や転落があった場合でも衝撃が少ないようにしております。

クリニックでは待合室にテレビや絵本が置かれていますが、一般的に病院ではあまり行われていません。今回の改装ではお子さんや保護者の方にできる限り快適に過ごしていただけるように、待合室にテレビや絵本を設置し、壁には楽しげな絵を飾っております。また、長時間の点滴や検査の際に保護者の方とお子さんがゆったりと待っていただけるようにリクライニングチェアを2脚用意しました。

■小児科外来からご来院されるお子さんの保護者の方への願いはありますか。

●当院小児科では神経、アレルギー、腎臓、循環器、内分泌、予防接種、乳児健診などの専門外来を行っています。時間帯や診察室を分けて診療を行っておりますので、前もってご相談、ご予約いただくことをお勧めします。



▲ゆったりと足をのばせるリクライニングチェアは、長時間の点滴もリラックスできます。

▶絵本やビデオをみながら、待ち時間も楽しく過ごせるようになりました。

